

ビジネス文書の書き方読本 一産業日本語研究会 ライティング分科会編について

How to write business documents

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院教授

佐野 洋

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 教授 (情報工学)

1 はじめに

1.1. 書き方マニュアルと書き方読本

ビジネス文書／書き方マニュアル（[1]、以下「書き方マニュアル」）は、産業日本語研究会ライティング分科会の大きな成果のひとつである。日本語を外国語に翻訳し易くするための表現転換の仕方を検討する過程において、表現そのものを対象として、文や段落、文章といった表現段階を前提として各段階で如何に表現を書き換えるのかを具体的に明らかにした。それに対して、ビジネス文書／書き方読本（試案）（[2]、以下「書き方読本（試案）」）は、思考様式の気付きと理解を中心に置き、第一に、母語（である日本語）への気付きー母語を用いる際の無意識の思考を意識化することと、第二に、母語表現を俯瞰的にみて、ひとつの外国語として取り扱える能力の涵養を特徴としている。これは、読み手の行動変容につながる信念の変え方（書き方）を使い分けることである。人の信念を変えることは、人が持つ知識の体系的な部分的な変更や再編にある。書き方読本（試案）（[2]）では、その主張（信念を変える語り方）として、文章の構成法として筋書きの型には、説得型と共感型の2つの表現スタイルがあることを述べ、それぞれが思考の基本である概念の作り方と、その作り方に応じて動き（時間の経過）の捉え方に違いが生じることを示す。そして話しの筋を支える点ー推想法において2つの表現スタイルが性質を異にすることを幾つかの対照的な用例を挙げながら説明する。

ところで、渡辺（[3]：46～83頁）は、日米の初

等教育における作文指導の実証的な調査から語る順序に着目し、時系列構造（日本人児童）と因果律構造（アメリカ人児童）を作文スタイルの特徴として見出している。教育内容とその変遷を子細に調査し、語り方の違いが、教育指導における積極的に涵養する能力の違い（共感力と分析力）から生じていることを示している（[3]：119～156頁）。この分析によるスタイル特徴に即していえば、説得型の筋書きは因果律構造の表現スタイルにあたり、共感型筋書きは時系列構造の表現スタイルに相応する。

人がどのように世界を了知しているのかは、思考方法や言語表現に色濃く反映されているわけで、書き方読本（試案）では、ライティングという所作を物事の表し方の心得、つまり知識を適切な表現で想起し（概念）、知っていることから知らないことを推論した上で（推理）、物事を分別したり評価したりすること（判断）ができるような理解に基づく技能として捉えている。

1.2. 共感型の表現スタイル

書き方マニュアル（[1]）の執筆を主導した横井は、生前本書をまとめる作業の議論の合間に、折に触れて日本語の有用性について、つまり日本語の際立った特徴点が前向きに活かされる場での益なることを挙げていた。それは現下の世界情勢にあって世界人口が急増し、地域に勃発する対立や衝突の絶えない状況、その問題解決に用いる言語（コミュニケーション手段）として日本語表現は役立つという定見である。

只、これは文字種が多く曖昧な表現ができる日本語を

使い熟すことを言ったのではなくて、その表現を生み出す背後の考え方や心持ち、思弁手段を取り入れるという意味だけでも、ずいぶんと役立つだろうというのが横井の評であった。会議メンバーに諭すように語る横井の視線の先には、長く日本語の研究と分析に携わり、その特徴を、広範に且つ細部に亘り深く探ってきたこと、そして、そのことを礎に英語などの他の言語への翻訳問題にも深く議論を積み重ねてきた中で見えてきたものが在ったのだろう。

例えば、主語を省略する、動作・行為の叙述を文の末尾に置く、状態表現や結果表現を繰返し使い、具体的な行為や指示の表現が見られないなどの特徴が、行き過ぎた利他性—空気を読むとか根回しによる予定調和や同調圧力など否定的な側面も勿論あることを分かったうえで、応報としての相互依存的な因果—お蔭様という縁起が遍在する言語社会があるという思いから、とある主張の下で論理的含意を手段として他を排斥することで説得する過程とは、甚だ違うということを使ったのだと思う。

自立した（他と対立する）自己の主張が結論を絶対的に含意するのではなくて、とある主張からお互いが納得できそうな結論を縷々と発想してゆくやり方で、他を包み込む手段—共感過程を重視するという、形式的には非論理的な日本語表現に潜在する思考様式のことを指摘したのである。

遡ること半世紀以上、東洋の合理思想を詳述した末木〔4〕は、欧米的合理主義を自我中心的合理主義といい『かかる自我中心的合理主義を要約して言えば、「自我に敵対するものを合理的に倒すこと」という一文に尽きるだろう。』（4）：302頁）と説明する。諸地域の闘争や紛争の繰返しを指摘し、その解消には合理性の考え方の中から自我中心の要素を無くすことを提言する。そして末木は自我を実体として自立させない東洋の弁証法の特徴を「楕円思考」と名付けてその有用性を説いている。近年、NVC（Nonviolent Communication¹、非暴力コミュニケーション）という観念が話題にのぼる。「共感を構築してより良い世界を実現する」ことであるという。云われなくとも共感過程を重視する日本語表現に潜在する思考様式に俯瞰の視点

1 <https://www.un.org/en/academic-impact/unlocking-your-emotions-achieve-sdgs-nonviolent-communication>

で公正に気づけばよいのであって、千歳にわたり我々の思考様式を支える東洋思想にこそ目を向けてもらいたいものだと思う。

1.3. 筋書きの型が含意するもの

説得型と共感型の2つの筋書きの型（表現スタイル）は、横井が示した文書作成モデル（〔1〕：14頁）の「発想段階」の分析に由来する。文書を作る際、具体的な言語叙述として表出される前の思考過程を発想段階と呼び、この段階で外面的には、断片発話やメモといった表現が見られるが、実質的には思考をまとめる段階である。一般には、伝達する対象や目的があって、はじめて文（文章）表現の戦略があると考えられるが、ライティング分科会では、発想段階に於ける文（文章）表現の戦略として、このモノの在り方（実在性と概念化）を中心に議論を進めた。具体的に、モノの在り方を動きの様子から捉え直した。つまり動きの意味を内省的に判断するのではなく、モノの在り方から制作すると考えるものである。

書き方読本（試作版）〔2〕では、上述した概要をもうすこし説明的に表現展開している。本稿では、思考の基本要素—概念、推理と判断（〔4〕：244頁）において性質を異にすることを、要素概念を対照させながら示す。

要素概念の多くは、従来から検討され指摘されていたことであるが、注目点として挙げるとすれば、（1）モノの概念化の2つの手段は、コトの概念化も含めて量化（数）と関係化（結びつき）という2つの叙述区分につながっていること、（2）推理規則を作るために使う概念の抽象化（一般化）に2つの手段があり、そのことが推論方法の違いに現れることである。前者は、書き方読本（試作版）〔2〕に掲載の事柄である。本稿では、ライティング分科会の議論に基づき量化と関係化を詳しく説明し、（2）を（1）と関連付けて説明する。

2 量化（数）と関係化（結びつき）

2.1. 認識を通じた概念

紀元前500年頃、古代アナトリアの哲学者ヘラクレイトス²は、「万物は流転している」と考えた。末木〔4〕：

2 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%98%E3%83%A9%E3%82%AF%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%83%88%E3%82%B9>

29 頁)によると、紀元前 6 世紀頃、初期仏教の教理は「諸行無常」(「三法印」の第一の法印)を説いており、それは「すべてのもの(所業)は不断に変化をつづけており、決して同一性を保たない。」ことを表す。下って 19 世紀から 20 世紀にかけてのフランスの哲学者、H. ベルクソン ([5]: 10 頁)は、「真の時間の本質は過ぎ去ることである。」と断じ、同時代の思想家・文人である岡倉天心は、「変化こそは唯一の永遠である。」³ と言いつづけている。

世界(外界と内界)は絶対無分節であり、井筒 ([6]: 13 頁)は、「言語によって無分節の「存在」が分節されて、存在者の世界が経験的に成立する。言語以前から言語以後へ、「無名」から「有名」へ——「存在」の形而上的次元から形而下的次元へのこの転換点に「本質」が出現する。」と説き、ベルクソン ([5]: 114 頁)は、「具体的な実在とアプリアリに人間が構築した実在とのあいだには、画然たる隔たりがある。」と忠告する。

詰まるところ、流転や無常あるいは不断の変化に対峙したとき、(何処にも無い)瞬間—2つの不連続的な点(不動点、不変点)を実体化することは、世間の闇を照らす明燈にも似て、モノを実在させ実用的な概念を生み出す。つまり連続を離散化することで普段使いの概念が得られる ([7]: 187 ~ 204 頁)。人が離散化という実体化手段を通して認識するモノゴトが実在世界に在るものである。ベルクソン ([5]: 92 頁)が定義づけるように、我々は「制作人(ホモ・ファベル)」である。

連続を離散化すること、これは現代風にいえば量子化である。谷口 ([8]: 102 頁)に拠れば、「量子化とは、連続のデータを有限個のクラスに振り分ける処理だと考えればよい。これを高次元のベクトル相手に、量子化の効率性が高くなるように適応的に行うのがベクトル量子化である。」と説明する。記号創発を探索する野心的な分野では、局所モデルと分散モデルという2つの概念の根拠説明 ([8]: 177 ~ 180 頁)があるが、深層学習分野が隆盛を誇る時節柄、後者の分散モデルのほうに利するところがあるようだ。

3 https://www.aozora.gr.jp/cards/000238/files/1276_31472.html
岡倉覚三、村岡博訳、「茶の本」

2.2. 外形存在と役割存在

書き方読本(試案) ([2])では、ベルクソン ([5]: 228 頁)のいう不動点に拠って実在化したモノを外形(幾何)存在と呼び、そして同じく不変点に基づくそれを役割(機能)存在と呼んでいる。図 1 で示すように不動点は、場所を見渡し、動きのない点列(場所の系列)を信じるもので、日本語では「~がある」という表現で表される。不変点は、順序を見渡し、変化のない点列(時間の系列)を信じるものであり、「~である」と表現される。

モノの概念が「~がある」で叙述される場合、説得型の表現スタイルが選好され、一方、「~である」と叙述されるとき、共感型の表現スタイルが好まれる。筋書きの違いの詳細は書き方読本(試案) ([2])を参照してほしい。ここでは量化と関係化の違いを、横井が好んで使った文例—「日本人は外国語が苦手だ。」を取り上げて説明する。

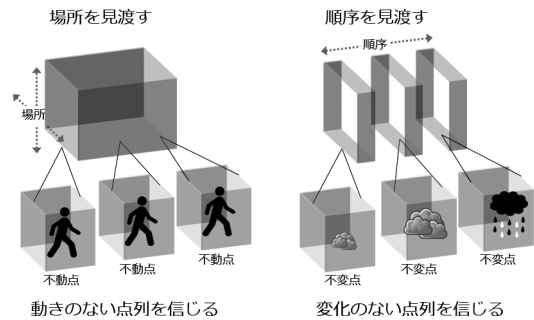


図 1 不動点と不変点のモノ

この例文の「日本人」という表現が、図 1 (左)によって分節されて記号付与(制作)されたとすると、この記号は外形(幾何)存在を表すので、数えられることを基体とする意味を持つ。つまり「日本人」は数えられる対象(「日本人がある」)である(表 1 の上段右)。量化表現—「~がある」では、主語が実在的に表明されるから、「判断は主語に述語をつけることによってなされる。」 ([5]: 95 頁)のである。

表 1

量化表現	「すべての日本人が、外国語が苦手だ。」 「いくらかの日本人が、外国語が苦手だ。」 「少しの日本人が、外国語が苦手だ。」
関係化表現	「日本人であれば、外国語が苦手だ。」 「いわゆる日本人は、外国語が苦手だ。」

これに対し、図 1 (右)によって記号が制作された場合、役割(機能)存在(「日本人である」)となるので関係化

された一相互依存的であることを基体とする意味を有する(表1の下段右)。関係化表現「～である」では、役割(機能)といった普遍性が実体としてあるから、個別よりも類が優先され(主辞として現れ)、述語によって関係が示される。認識者との間の関係として「外国語が苦手」で在ることが「日本人」を概念化させている。

この述語によって示される関係が在る(実在する)ことを、無理矢理に東洋思想に関連付けると、先に挙げた「三法印」の第二の法印、「諸法無我」([4]:29頁)であり、これを末木([4]:30～31頁)は、「[無我]とは「無実体」ということ」、そして「実体がないので、すべてのものは「それ自身によって存在する」ことはできず、したがってすべてのものは「他によって」存在する。」と言う。総じて役割(機能)存在は相互依存的である。

2.3. 概念の特質概観

説得型の表現スタイルで見られる「～がある」という概念は、井筒が言う『具体的、個体的リアリティ』([6]:41頁)であろうし、末木([4]:30頁)は、それを『常に同一性を保っていて、自己の力で存在し作用するもの』であろう。図1にある不変点ではなく時空間の中で不変という意味での不変の実在である。

認知科学の分野では、「記号主義的な記号システムで名を有する概念」([8]:41～54頁)に相当し、局所表現される対象なのだろう([8]:177～179頁)。その特徴は、要素数の数え上げが可能なこと(情報表現に必要なビット数が多いこと([8]:178頁)、図1(左)にあるように単一の空間を想起することから決定論的で上位-下位関係から成る意味ネットワークの形成ができること、述語論理でいう述語の変項に代入できることなどである([9])。この代数的要素であることは、井筒([6]:13頁)のいう『それをそのものとして他の一切から識別させ、他の一切と矛盾律的に(つまりXは非Xではないという形で)対立させるような何か、』である。

共感型の表現スタイルで見られる「～である」という概念は、井筒のいう「普遍的リアリティ」([6]:41頁)かもしれない。関係性が在ると見做すモノの見方であり多項の述語論理である。いわゆる「縁起」や「因果」であり、これを「相依性」([4]:31頁)という。

「～である」による概念化が、マルチモーダル情報⁴を用いた知覚的記号システム([8]:51～53頁)に由来するものに類するかどうか分からない(理解できない)が、谷口が挙げる分散表現の特徴([8]:177～180頁)を紹介する。情報表現に必要なビット数が少ない、属性の表現が期待できること、特徴の演算が可能なことである。今後とも、[8]を参照して、分散表現と役割(機能)存在との関わり合いを考察したい。

3 推理と判断

3.1. 二つの存在と動き(時間の経過)

図2は、実在化したモノの動き(時間の経過)をイメージ化した図である。図2の左にあるように、「～がある」で表される外形存在は位置変化するから、この外形存在のモノから制作される動きは移動が中心である。発想(判断の手がかり)は、「ここ今」に在る原因・理由をもとに、「より後」(将来)に何が起きるのかを叙述することを特徴とする。これは、時間の経過が順行する考え方で、一般の物事から個別の物事を結論する思惟であり、演繹的な思惟と言い換えられる。モノと出来事が起こる確からしさ(モダリティ⁵)は、あらゆる出来事の集合における個別の出来事の起こる割合であるから頻度推定主義的な推測による解釈結果が叙述に使われる。

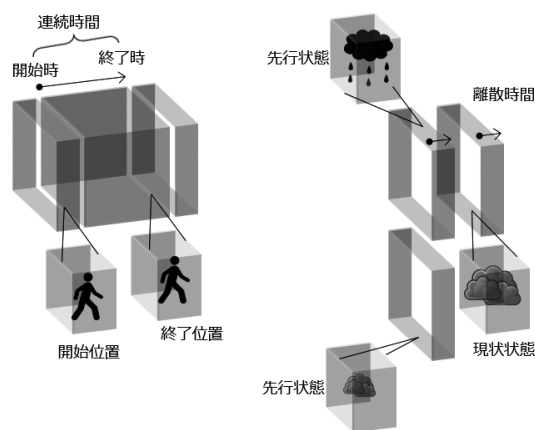


図2 動き(コト)

不動点には、外形を持つモノが在ると考えるので、場所という概念が物事の実在を支える。因果性があること

- 4 認知科学でいうモダリティで、知覚感覚情報をいう。
- 5 言語学でいうモダリティで、話し手の判断や態度に関する言語表現の体系をいう。

は、場所の近接と時間の近接が支持となり（[10]：35～49頁）、その関係性の実在を顕す。動きの由来は、力や意志であり、無意志の場合には作用が用いられる。大局文脈でも局所文脈でも特定の場所と特定のモノが唯一を表す。

「～である」で表される役割存在は質変化するから、この役割存在のモノから制作される動きは遷移が中心である。発想（判断の手がかり）は、「ここ今」の状態（結果）をもとに、「より前」（過去）に何が起きたのかを叙述することを特徴とする。これは時間の経過が逆行する考え方で、個別の物事から一般の関係を結論する思惟であり、帰納的な思惟と言い換えられる。モノと出来事の蓋然性表現（モダリティ）は、現状状態を説明する尤もらしさ（尤度）と事前の信念に拠ることから、ベイズ推定主義的な推測による解釈が叙述に現れる（[11]）。オントロジー工学の視点では、役割は状況に依存して変化する個物の概念（[9]：176頁）とされ、不変点由来の概念化物は、上記のように状況依存性の強い推論形式が利用される。

3.2. 推理法

演繹的推論は量子子との関係が深いことが知られている（[12]：41～47頁）。前件や帰結を表す文を命題に準えて、モノ（名詞や体言）で表現される部分を変項として扱い、変項は「すべての」「いくらかの」といった量化表現で限定されるので集合論とも整合する。図2（左）に挙げたように、不動性によって分節化された外形（幾何）存在は、外観で判断できる対象であり数えられる概念物であること（量的概念）や、単一の世界の世界観から部分と全体の関係性を持つことなどの特徴とつながりがある。

一方、図2（右）にあるように現状状態に注目し、その結果を生じさせた原因や理由の尤もらしさに焦点をあてた推論研究は条件推論と呼ばれ、帰納推論と仮説演繹推論と関係が深いことが指摘されている（[12]：105～117頁）。「～である」が表す表現世界は複数の状況の順序（図1の右）に注目するので条件推論に思考形式が偏る（[11]）。

このように異なる分節過程を経た概念形成の違いは、思考の土台である推論様式の違いとして顕現する。なお、類推（[13]）も思考の強力な道具であり、ライティンク分科会では、2つの筋書きと連関の分析を進めていく

予定である。

3.3. 一般化と判断

概念間の関係は抽象化、あるいは一般化の道具であり、概念関係によって意味を拡張させたり関係性を表したりする。とくに後者は推論に用いられ、代表的な関係に上位-下位関係と部分-全体関係がある。

溝口（[9]：160～161頁）は、一般性と粒度の観点から is-a（上位-下位）関係と part-of（部分-全体）関係の違いについて、前者が「概念が含むインスタンスの多さ」と表し、後者を「それを部分として用いることができる状況（全体物）の多さ」と峻別するとともに、一般性の概念は、どちらの関係を前提とするのかによって異なった解釈が生じることを指摘している。

1.3節で挙げた（2）の点に関して、「～がある」（説得型の表現スタイル）では、個別要素とその集合から類（クラス）概念を作り、is-a 関係を基本として一般化が行われる。一方、「～である」（共感型の表現スタイル）は、相対的な part-of 関係を用いて一般化が行われる。相対的な部分-全体関係とは、入れ子模様の部分-全体関係で、部分を集めても全体にならないものとする。位相論でいう被覆（[14]：174～179頁）の性質を持つ全体集合と見做す。2つの筋書きに対し、一般化の概念関係として包含関係と包摂関係を分けて考えるのである。

4 おわりに

4.1. 納得

日米の作文指導の違いを調査した渡辺（[3]）は、作文指導の価値観に言及し、「日本では共通の体験を通じて心の目を養うことであって、アメリカのように書く目的に応じ様式を選ぶ訓練ではないからだろう。」（[3]：80頁）と説明する。指導書に挙がる作文構造が、「（1）初めの考え、（2）考えを変えるもとなった出来事、（3）今の考え」（同上）であることを示している。考えを信念と読み代えれば、信念更新のベイズ推定式とそっくりである。共感型の筋書きが日本語に見られる一因かもしれない。

4.2. 書き方マニュアル

書き方マニュアル（[1]）で詳細に示した書き換え規則とは、いわば、言語表現上で、関係化世界と量化世界を結びつける手段（具体的には、語や文、文章レベルでの変換規則群）であったと考えることができる。

参考文献

- [1] 日本語マニュアルの会、“日本人のための日本語マニュアル（暫定第1版）,” 11 2018. [オンライン]. Available : <https://ngc2068.tufts.ac.jp/nihongo/htdocs/>.
- [2] ライティング分科会、ライティング分科会報告書、特許情報研究所：一般財団法人日本特許情報機構、2023.
- [3] 渡辺雅子、納得の構造 - 日米初等教育に見る指向表現のスタイル -、東洋館出版社、2004.
- [4] 末木剛博、東洋の合理思想、法蔵館文庫、2021.
- [5] アンリ・ベルクソン著 原章二訳、思考と動き、平凡社、2013.
- [6] 井筒俊彦、意識と本質 精神的東洋を求めて、岩波文庫、1991.
- [7] 大森荘蔵、時間と存在、青土社、1994.
- [8] 谷口忠大、心を知るための人工知能 認知科学としての記号創発ロボティクス、共立出版、2020.
- [9] 溝口理一郎、オントロジー工学、オーム社、2005.
- [10] スティーブン・マンフォード、ラニ・リル・アナム著、塩野直之、谷川卓訳、哲学がわかる 因果性、岩波書店、2017.
- [11] 佐野洋、“2つの認知過程－量化と関係化の意味と思考様式、” 電子情報通信学会 信学技報、pp17-22、TL2023-5、2023-06、2023.
- [12] K・マンクテロウ、服部雅史他訳、思考と推論 理性・判断・意思決定の心理学、北大路書房、2015.
- [13] 鈴木宏昭、類似と思考 改訂版、ちくま文芸文庫、2020.
- [14] 藤田博司、「集合と位相」をなぜ学ぶのか、技術評論社、2018.